

海の視座から見る〈国生み〉神話 ——〈島々〉の誕生と〈海〉の靈性

菅田正昭

記紀の「くこ国生み」神話でイザナギとイザナミによつて産み落とされながら、なぜヒルコは海に流され、アワシマは「子のうちに入らず」とされたのか。旧来の男尊女卑説によらず、島と神の誕生の順序と「海の靈性」に着目することで、その謎を解き明かしつつ、大八島国成立の本源へと迫る。

神々よりも島々が先に生まれた

〈国生み〉神話

記紀神話におけるイザナギとイザナミは、『旧約聖書』創世記のアダムとエバのような存在である。ただし、アダムとエバが神（主なる神＝造物主）によつて作られた人類の祖であるのにたいし、イザナギとイザナミは『古事記』によれば「高天原たかまの原に成りませる」神世七代かみよななよの最後の神々であり、大八島おおよしまとその周辺の島々、そして多くの神々を生んだ創造的な神である、という違いがある。すなわち、ギ・

ミ両神も人類の祖神ではあるが、神に造られたのではなく、彼ら自身が陸地や様々な自然神を生み出したのである。ここで、ギ・ミ両神による、いわゆる〈国土生みくにとうしゅう〉神話を、『古事記』を中心に復習しておこう。

イザナギとイザナミは高天原から「天の沼矛ぬぼこ」（紀・天瓊矛）を下ろし、天の浮橋に立つて「塩しほこをろこをろ」と掻きまわして引き上げたときに、その矛の先から滴る塩が積もつてオノゴロ（記・淤能碁呂、紀・磯馭慮）嶋が形成された。そこへ天降りして「天の御柱あめのみしら」を立て、その周りを廻つて「国土生み」をするわけである。

ところで、ギ・ミ両神が天から沼矛を下ろした場所は下界の海水の中である。ところが、記紀には海の存在を想定させる「塩」または「潮」の字はあるものの、「海」も「海水」の字もないのである。すなわち、この時点では、天と海が分離する以前のアマの概念があったと思われる。

もちろん、そうは言っても、現実には「海」はたしかに存在したのである。すなわち、アマの音韻交替形であるアメには天と雨の両義があるように、アマとしての海は大水（オホミ↓オウミ）の義と考えられていたからである。しかも、そのアマなる海は塩辛いだけでなく、浮遊物がふわふわと漂っていたのである。

実は、ギ・ミ両神は、彼ら以前に高天原に成った天つ神たちの「この漂へる國を修理固め成せ」との命を受けて天つたのである。それは『記』本文の冒頭近くにある「國くに稚く、浮かべる脂あぶらの如くして水母くらげなす漂へる時」に対応する。オノゴロ島の形成と、そこへ「天の御柱」を打ち込むことで、ふわふわと陸地が浮いている原始海を修理固成するためであった。

オノゴロ島は塩が「自ら凝り固まる」の義と言われるが、おそらく、その島は小さくても堅固で、最早浮遊しない島であり、ギ・ミ両神はそこへ降りて修理固成の拠点とするわけである。そして、天の御柱の周りを、イザナギは右回りに、イザナミは左回りに廻って、いわゆる夫婦めおとまごわひ交合をす

るのである。その結果、子こ・水蛭子みづこと淡島あはしが生まれたが、柱を廻ったとき、女神のイザナミが先に声を掛けたこと、すなわち「女人をんな先立ち言ひしはふさはず」との理由で、「子の教」には入れられなかった。

一般的には、この情景は、古代中国の男尊女卑の思想が、『古事記』が成立したという八世紀の初め頃には、我が国でもすでに根付いた証拠と想われている。ちなみに、記紀神話は男女の性器の違いを、微笑ましくエロス溢れる形で描写しているが、『記』の場合はいわゆる「夫婦交合」という言葉を使わず「美斗みとの麻具まく波比はひ」と「隠處かくみどに興おこ（す）」という語を採用している。一方、『紀』本文は「遵合みちあはひして夫婦と為る」、第一の「一書」では「為夫婦」と記しているが、ここで、まず注目しなければならないのは、『紀』本文が「夫婦」を「をうとめ」と訓ませていることである。一般的には「夫婦交合」の「夫婦」は、日本では「めをと」とか「みようと」と訓む。「め」にせよ「みよ」にせよ「女」の義であり、もちろん、「を」あるいは「を」とは「男」の義である。すなわち、「めをと」＝「めおと」とは、「女男」あるいは「婦（妻）夫」の意味なのである。欧米のレディ・ファーストよりずっと以前の神代Ⅱ古代から、わが弧状列島では、夫婦関係においては、女性のほうが男性よりも若干、優位に立っていたということが「夫婦」を「めをと」と訓むことで証明される。

そのことは、職業としての「アマ」という語を考えると、ふつう「海人」よりも「海女」のほうを想起しやすいことでもいえる。しかも、アマというと、仏教渡来後のことになるとなるが、「尼」や、さらに、「この、あまっこ」というような言い方の中に「娘」や「若い女性」を感じたりさせる。すなわち、アマという言葉には、天や海の義のほか、こうした「女性」性の響きが内包されているのである。

ちなみに、『古事記』の「美斗の麻具波比」を「夫婦交合」と読む人もいるが、「美斗」の「美」は美称の「御」の義で、「斗」は「陰部」を意味する「門」のことである。すなわち、イザナミが「あなにやし、えをとこを」と、イザナギが「あなにやし、えをとめを」と呼び合うのは、お互いの立派な性器を褒め合っているわけである。いいかえれば、男尊女卑の精神構造の中での「夫婦交合」の失敗ではないのである。

にもかかわらず、ヒルコは「葦船に入れて流し去りつ」とされ、淡島も「子の数に入らず」とされてしまうのだ。可哀想に、ギ・ミ両神に認知されなかつたわけである。何故なのか？

国学者も神道学者も、民俗学者も歴史学者も、文化人類学者や比較神話学者も、誰も指摘しないが、天つ神の「修理固成」の命を受けているのに、カミシマの順序でヒルコとアハシマを産んでしまったからである。その「失敗」

のあと、ギ・ミ両神はまず島々を生み、ついで神々を生んでいる。すなわち、神々よりも先に島々を生まなければならなかったのである。少し賢しら立てて言えば、神々を齋き祀るのは神々の子孫である人間だが、その人間が住むべき島々をまず最初に生んでおかなければならなかったのである。

もちろん、「島々の誕生」以前にも陸地があつた可能性は、『古事記』の「國稚く、浮かべる脂の如くして水母なす漂へる」という記述からも明らかである。ただし、その「國」はいわゆる「国家」の義のクニではなく、語源的にはクガ（クヌガの約で陸地の義）とか、キゲネ（屋敷まわりの樹木）のクネ（地境の義）の、要するに単なる「土地」を意味する。いいかえれば、まだ神々が齋き祀られる土地になっていないのである。「國」から「島」になって、初めて神々が愛でし土地としての、聖別された陸地になるのである。

太陽神として再生するため 海へ流されたヒルコ

次に、押さえておくべきことは、ヒルコとアハシマの「誕生」の意味である。「子の数に入らず」と記されることで、逆に、ギ・ミ両神から生まれた、それ以降の「御子」たち、すなわち、大八島国とその周辺の六島の計一四島や、

そしてイザナミの「神避り」までに生まれた三五神たちからは超越した存在である、ということがうかがえる点だ。しかも、島々と神々は同じギ・ミ両神から誕生した「兄弟姉妹」である。いいかえれば、「島」も一種の「神」なのである。もちろん、その関係はギ・ミ両神に認知されなかったヒルコとアハシマについても言える。

ヒルコは葦船に乗せられて流されたわけだが、この「葦船」は、出雲国の大国主神に「国譲り」を進言したあと、自らは青柴垣を張り巡らした船を傾けて海中に隠れてしまった八重事代主神の「船」や、綿津見神のいるこの宮へ向った山幸（火遠理命）の「間なし勝間の小船」に匹敵する。御棺のことをフネともいうが、これらの船は一種の水葬儀礼の象徴である。他界としての異郷への旅立ちのための乗り物である。

『日本書紀』本文によれば、「日の神」と「月の神」を生み、その二神を「天に送りまつ」ったあと「次に蛭児を生む。巳に三歳になるまで、脚猶し立たず。故、天磐櫛樟棺に載せて、風の順に放ち棄つ。次に素戔鳴命を生みまつります」とある。すなわち、「蛭」という漢字に引きずられて、ヒルコを「脚萎え」の、あるいは「骨なし」の、ぐにやぐにやの障害児だったから遺棄されたのだと捉える解釈もあって、そのことから記紀神話があたかも障害児差別を助長していると糾弾する人もいる。

だが、このヒルコは「日の神」、すなわち「天照大神」あるいは「天照大日靈尊」の別名もある「大日靈貴」のヒルメに相對する。ヒルコのヒは「日」、ルは「の」、コは「子」の義であり、ヒルメは「日の女」（本来は日の神に仕える巫女の義）のことである。いいかえれば、ヒルコは將來の「太陽神」として再生するため、常世あるいはニライカナイの海へ流されたのである。万生の「産み」の母たる「海」という子宮の宇宙へ回帰しよう、というわけである。すなわち、より高次元の神へと甦るための「儀式」であったと考えられる。

出雲神話のコトシロヌシは父神オオクニヌシへ「国譲り」を進言したあと入水したが、伊豆諸島独自の開闢神話を伝える『三宅記』によれば、印度の王子に生まれ変わり、継母にいじめられながらも、やがて日本へ渡来し、アメノコヤネ（天兒屋根命）中臣・藤原氏の祖神）によって元の姿に変えられ三嶋大明神となつて、オオヤマツミ（大山祇命）の協力を得て伊豆諸島を造つた。出雲の八重事代主神にも伊豆諸島の八重事代主神にも、エビス神としての面貌があるが、『古事記』のヒルコの「蛭子」もエビスと訓むことができることから、恵比寿（戎）神社の祭神として祀られている。もちろん、エビス神は福をもたらす神である。

兵庫県西宮市に鎮座する西宮神社は元の名を西宮戎社といい、記紀神話のヒルコ（蛭子神）が流れ着いた場所とい

われている。さらに、大阪府堺市西区の石津いわた太神社と同堺区の石津いわた神社は、ともに『延喜式』神名帳の「和泉国大鳥郡 石津太神社」の論社を名乗り、どちらも「日本最古の戎社」を称していて、蛭子大神が漂着したという伝承を持っている。いずれにせよ、瀬戸内海の沿岸域である。なお、歴史学者の水野祐氏は『日本神話を見直す』（学生社、一九九六年）の中で、水蛭子を「嶋名」としている（一二二頁）が、ツグ水蛭子とあるように、やはり神名として捉えるべきであろう。

安産や子育てなどの神と信仰された アハシマ

一方、淡島は紀伊半島と淡路島との間にある友ヶ島（和歌山県和歌山市、沖ノ島・地ノ島・虎島・神島の総称）の中で一番小さな神島（粟島とも呼ばれた）と考えられるが、かつてここには淡島明神が鎮座していた。和歌山市加太に鎮座する加太淡嶋神社は『延喜式』神名帳の「紀伊国名草郡 加太神社」に比定されていて、友ヶ島から遷座したのが現在の同社だといわれている。ただし、同社の縁起によれば、神功皇后じんこうが三韓征伐からの帰路、瀬戸内海で暴風に遭遇した際、神に祈って船の苦（スゲヤカヤを編んで屋根代わりにしたもの）を投げ込み、その流れに導かれて船を進めたところ、無事にたどり着くことができたという伝説

から創建されている。すなわち、友ヶ島のトモは「苦」の転だというわけである。

実は、この友ヶ島が古くは摂津国の住吉大社（祭神は底・中・表の筒男命つつのおみなこと住吉三神と神功皇后）の神領だったことから、神功皇后に付会する縁起が生じたものらしい。さらに、粟島大明神は住吉明神の妃であったが、帯下の病気でこの地へ流されたという伝承もある。そこから、婦人病に靈験があるという信仰が生じ、江戸中期ごろ、淡島願人と呼ばれる民間宗教家たちが粟島大明神を祀った小祠を背負い、鈴を振りながら明神の由来を述べ、門付をして諸国を回ったのである。もちろん、この淡島信仰には、安産・子育て祈願、水子供養：等々も含まれていた。

厳密に言えば、記紀神話のギ・ミ両神から「子の数に入れず」とされた淡島を、友ヶ島に当てはめることはできないのかもしれない。しかし、いわゆる「国生み」神話の舞台となったオノゴロ島に比定されている淡路島の南端に浮かぶ沼島（兵庫県南あわじ市）と、友ヶ島はひじょうに近いのである。また、オノゴロ島に関しては、沼島ばかりではなく、今は内陸化して消えているが、大阪湾内説もある『古事記』の「仁徳天皇」記は、天皇が淡道島（淡路島）へ行幸されたときの歌として

「おしてるや 難波の崎よ 出で立ちて 我が國見れば
淡島（原文・阿波志摩） 淤能碁呂島 檳榔の（原文・阿

遅摩佐能) 島も見ゆ 佐気都島見ゆ」

を紹介している。ちなみに、岩波文庫版『古事記』(倉野憲司校注)は「佐気都志摩」(記原文)を「放つ島」と解し「放れ島」の義と捉えている。ギ・ミ両神から認知された最初の子は「淡道之穂之狭別嶋」、すなわち淡路島である。そのサワケのサはワケ(別・分は「若」と同源)に係る接頭語だが、アハジノホノサワケを「神名」的島名と考え、「佐気都」の場合も同様に考えたほうがよいと思う。いずれにせよ、難波と淡路島の間には「淡島」や「淤能碁呂島」が実在していたのである。

点在する島々に神々が鎮座していた 難波の海

その在り処だが、『延喜式』神名帳の「撰津国東成郡難波坐生国咲魂神社二座(並名神大・月次相嘗新嘗)」に比定されている大阪市天王寺区生玉町に鎮座する生国咲神社の周辺ではないかと思われる。この地は古代の大坂湾が奥深く入り込んでいて、記紀神話の時代には「血沼の海」(紀・茅渟海)と呼ばれる瀬戸内海の続きとしての内海が広がっていた。その難波の海のはぼ中央部には南側から長クトンボ口状の岬が延びていて、その岬(難波碕)の先端に鎮座していたのが、この生国咲神社のイクシマ・タルシマの神である。

おそらく、トンボ口の岬が成長していく過程を、周辺の海人族は不思議そうに眺めながら、その陸地拡大の光景を「生島・足島」と捉えて名付けたにちがいない。まさに、その情景は、『古事記』が言うところの「浮かべる脂の如くして水母なす漂へる」状態を想起させるものだった。「国」がまだ「稚」だったのである。

もちろん、この南撰津の周辺には、多くのシマジマが点在していたと思われる。坐摩、比賣許曾、今宮戎、住吉……等々が鎮座する地も、古代は、島であった可能性がある。当然、生島・足島の神が齋き坐します地も、岬へと成長していく以前は「島」であったと考えられる。神名と地形がそのことを物語ってくれる。

『延喜式』によれば、古代の宮中には「生嶋坐の祭る神」として「宮中神三十六座」の中に「生嶋神・足嶋神(並大月次・新嘗)」が奉祭されるほど、ここの神は重視されていた。そして、天皇の一世一代の即位儀式である大嘗祭の翌年には、八十島祭が生嶋坐の奉仕によって執り行われた。この「八十島」という数字は「たくさんの」という意味であって具体的な島の数ではないが、古代の「生嶋・足嶋」周辺の難波の海には多くの島々が点在していたはずである。『古事記』のアハシマ、オノゴロシマ、アヂマサノシマ、サゲツシマも、そうした「八十島」の島々の一つであったと思われる。そして、「八十島祭」が宮中で重視されたの

は、「八十島」がやがて国土全体を意味するようになったからである。鎌倉前期の華厳宗の僧で梅尾とがのおの高山寺を営んだ明恵上人（一一七三―一二三二）の言葉を借りれば「自体即ち国土身」としての、わが弧状列島の全体が「八十島」となったのである。

天皇陛下の即位に際して「八十島祭」を行うのは、おそらくイザナギ・イザナミの「国土生み」神話の根源まで初期化させ、誕生したばかりの大八島国の瑞々しい靈力を、新しい天皇へ付着させて「自体即ち国土身」と「玉体」の靈力を増強させる、という一種のタマフリの神事であったと想われる。そのためには、オノゴロシマやアハシマの存在は、靈的に重要であったと考えられる。それが途絶してしまったのは、おそらく海が後退して消えてしまったからではないかと想われる。

すがたまさあき 菅田正昭

昭和20年東京生まれ。学習院大学法学部卒業。同46年から49年まで東京都青ヶ島村役場職員、平成2年から5年にかけて同村助役を務める。主著に『日本の島事典』（三交社）、『アマとオウー弧状列島をつらぬく日本的靈性』『隠れたる日本靈性史』（たちばな出版）、『古代技芸神の足跡と古社』（新人物往来社）、『第三の目』（学習研究社）ほか多数。現在、自身のホームページ「でいらほん通信」で独自のシマ論を展開している。日本民俗学会会員。



ヒルコとアワシマは 「海の靈性」によって救われた

ところで、ギ・ミ両神の最初の夫婦交合の試練の結果として誕生したヒルコとアハシマは、「子の数に入れず」ということにされたが、瀬戸内海から難波にかけての古代の海人族は、彼らを見捨てずに祭祀を続けてきたのである。いうならば、「海の靈性」によって救われたのである。もしかすると障害児として流し棄てられたかもしれないヒルコは、〈天・海・女性〉の義を持つ《アマ》の靈性によって救済され、未来の太陽神となるべく水平線の下で待機しているのかもしれない。単なる商売繁盛の戎社の祭神ではないのである。一方、アハシマも一般的には胎盤として解釈されているが、島であるのに、婦人病への癒しばかりで

なく、安産・子育ての守護神として役目を果たしている。まさに、子育て放棄、少子化、乳児虐待：等々の今日的課題について、「子の数」に含まれなかったヒルコとアハシマは、その解決方法の模索を物語ってくれている。

『古事記』はヒルコとアハシマの誕生と遺棄のあと、大八島国と周辺の島々の誕生を描写しているが、ギ・ミ両神が島々を生んでいるのに、世間では、これを「国（土）生み」神話と名づけ、「島」の重要性と意義を唱えることを「島国根性」と蔑視する傾向にある。いわゆる「国（土）生み」

神話がギ・ミ両神による「カミシマ」の誕生、そのあとの「島―神」の誕生の二段階から成立しているのに、世間はそこも見ようとはしないのである。たとえ見たとしても、男尊女卑へのアブリオリの批判の視点でしか見ないのである。しかも、海という漢字が登場しないことを幸いに、海を無視して結局は島をも無視してしまうのである。大八島国誕生の原点としてのギ・ミ両神の夫婦交合の「失敗」のほうに、もっと目を向ける必要がある。そこには海が隠されている。